

簡閲点呼における軍艦および軍楽隊派遣にみる大正期の日本海軍による広報活動

中嶋晋平

本稿は、戦前期の日本海軍が行った簡閲点呼における軍艦および軍楽隊の派遣についての実態解明を通じて、日本海軍による多角的な広報活動について検討するものである。

第一次世界大戦期以降、志願兵の確保に苦慮していた海軍は、地域社会において海軍に対する理解と協力を引き出すため、積極的な広報活動に乗り出す。1919年6月、広報活動を主目的とした初の軍艦派遣は成功をおさめ、軍艦観覧や便乗、軍楽隊の演奏などによって、13万人を超える人々を動員した。その結果、海軍部内で広報活動を目的とした軍艦および軍楽隊の派遣を求める声が高まり、在郷軍人の質の維持向上を目的とした艦上簡閲点呼の「副産物」として広報活動が実施されることとなった。その後、艦上簡閲点呼における広報の場としての重要性は増し、軍楽隊演奏をはじめとする複合的な広報活動が本格化する。また地方紙の分析では、これら活動の地域での実態を明らかにしている。